



羅針盤



安部 正敏
Masatoshi Abe

医療法人社団廣仁会 札幌皮膚科クリニック 院長, 褥瘡・創傷治癒研究所, Visual Dermatology 編集委員

時論公論・持論独論

この度、伝統ある本誌の編集委員を務めさせて頂くことになりました安部正敏です。拝命して1年弱、編集委員会には新入編集委員が読者の先生方へのご挨拶を兼ねて1号責任編集をするとの(暗黙の?)制度があるようです。この度、筆者が選んだテーマは“アプレミラスト”。その詳細は本誌中身をご覧頂くとして、栄えある“羅針盤”では本誌編集委員としての抱負?を謹んで認めさせて頂きます。

初回の編集委員会の末席を汚させて頂いた際、まず思ったのは、本誌編集委員の先生方の妥協のないプロ意識でした。内容はもちろん、真のサイエンスから写真のクオリティーまで、読者の知的好奇心をいかに満足させるかという辛労辛苦を肌で感じました。これまで読者側にいた人間からすると、雑誌は毎月当たり前のように出てくるという錯覚を覚えていましたが、卓越した皮膚科学者が作る学術雑誌は決してAIには真似できない珠玉の一冊となるのです。なお、不肖小生はそのような才がないものの、せめて日本語には気をつけようと、編集委員の先生方の“こだわり”との表現は避けました。そもそもこの語の本来の意味は“拘泥”です。

本誌の大きな特徴に、皮膚科学最新のトピックスを、その道のスペシャリストが写真や図をふんだんに使用し解説するわかりやすさがあります。新聞の社説は時に一読では理解できませんが、NHKの報道番組“時論公論”では、その道のスペシャリストである解説委員が、映像を交えながら解きほぐすため、理解が容易です。

一方で、そのNHKに“持論独論”という番組があるのをご存知でしょうか? これは前述の“時論公論”とは異なり、解説委員ならぬタレントが自分の興味を持つ話題を独自に語るといった番組です。例えばタレントの小籾千豊さんが、“お釈迦様の誕生日を論ずる”といった具合

です。この番組は“時論公論”のパロディー的な要素が強いものの、考えてもみなかった話題が登場し、なかなか面白い番組です。

この両者の関係は、まさに皮膚科学に通じるところがあると思うのは筆者だけでしょうか? 学術集会で皮膚科学問体系を学ぶ教育講演に並行して、診断に苦慮する1例の症例が提示され、対話と討論により両者が両輪となって、皮膚科学が発展するよう思えます。

今回、筆者が編集委員に加えて頂いた目的は、恐らく皮膚科クリニック勤務医として、地域医療の視点を本誌に反映させる……という重責であろうと勝手に考えております。忙しい日常診療の中、どこの教科書にも載っていない(自分だけが思っているだけかもしれない……)新病名……。自ら編み出した(学会発表したら必ずや大御所から叩かれる……)秘伝の軟膏レシピ……。誰も書くことのできない(reject率100%)至高のケースレポート……。 “持論独論”には皮膚科学を大きく発展させる一寸したヒントがまだまだ満載なのかもしれません。本誌読者、とくに若手の先生、そして何よりクリニック勤務の先生方! 学術集会などで筆者を御見掛けの際には、どうぞ何なりと忌憚のないご意見をお寄せください。ご期待に沿えないことも(が?)多いかと思いますが、編集委員会とのパイプ役となればこの上ない喜びです。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

末筆ながら編集委員たるもの、本誌を全面的にアピールすべきところではありますが、筆者が“皮膚科の臨床”誌で連載中の鉄道と皮膚のエッセイ“懂鉄雑感”も、引き続きのご愛読よろしくお願いたします(最後の一文は当然編集部で削除命令!となりますが、自らの編集委員の特権でそれは阻止できるでしょう。これぞ“持論独論”です!)